

『和漢朗詠集』の配列における和歌の役割 ——付項目を中心にして——

長谷川 友紀子

古典集成によつた。

一、はじめに

平安中期、藤原公任によって編纂された詞華集である『和漢朗詠集』（以下、適宜『朗詠集』と略称）は上巻に四季の各部、下巻には特に記されていないものの、仮に雜部と称しておくと、上下二巻五つの部立の下に百余りの項目を立て、およそ八百首の詩歌を分類編纂する。本集はこれらの項目の下に日中の漢詩文摘句及び和歌を並列したところに大きな意義を持ち、その為『朗詠集』は先行の詞華集等とは異なる性格を有している。本稿では『朗詠集』に立てられた項目の内、付項目に注目し、その構成方法から和漢並列の意義、特に和歌の果たした役割について考察していきたい。

尚、『朗詠集』本文は粘葉本より翻刻し、詩歌番号等は新潮日本

『朗詠集』に立てられた項目を最善本とされる粘葉本の目録から示しておこう。

上巻	春	立春	早春	春興	春夜	子日付若菜	三月三日(付桃)
	暮春	三月尽	閏三月	鶯	霞	雨	梅付紅梅
							柳
							花
	夏	更衣	首夏	夏夜	端午	納涼	晚夏
	螢	蟬	(扇)			花橘	蓮
	秋	立秋	早秋	七夕	秋興	秋晚	秋夜
	日付菊	九月尽	女郎花	萩	蘭	槿	前栽
							紅葉付落
							九

雁付帰雁 虫 鹿 雾 擣衣
 冬 初冬 歳暮 炉火 霜 雪 水付春水 霞 仏名
 下巻 『雑』 風 雲 晴 晚 松 竹 草 鶴 猿 管絃付舞妓 文
 付故宅 仙家付道士隱倫 山家 田家 隣家 山寺 仏
 事 僧 閑居 眺望 餓別 行旅 庚申 帝王付法皇

親王付王孫 丞相付執政 将軍 刺史 詠史 王昭君
 妓女 遊女 老人 交友 懐旧 述懷 慶賀 祝 恋
 無常 白

粘葉本目録中には、波線部「子日付若菜」のように「項目A付B」の形で項目名をあげているものがある。以下「付B」にあたる部分を付項目と称する。付項目は上巻九、下巻八、計十七項目に見られるのだが、そもそも付項目とはどのような性格を有するのであらうか。

上巻の場合付項目の性格は大きく二種類に分けることができる。一つは節日にその節日と関係の深い景物を組み合わせた物である。「子日付若菜」「三月三日付桃」「十五夜付月」「九日付菊」がこれに当るだらう。

『朗詠集』上巻の項目自体の配列は、すでに指摘されるように各季節の前半に歳時、後半に景物が配されている。例えば春部では

「立春・早春・閏三月」までが歳時、続いて「驚」から「款冬」までが景物となつてゐる。従つて春部「：春夜・子日付若菜・三月三日付桃・暮春…」、秋部「：秋夜・十五夜付月・九日付菊・九月尽…」と歳時の流れに配されるこの四項目は、「若菜」「桃」といった景物が「付」とならなければ、節日と並んで配されることは適わないものである。

節日に景物を組み合わせることについては、三木雅博氏が『古今和歌六帖』に「子日」と「若菜」というように、節日と景物を一続きにしてとらえた先例がある」といふ指摘のようだ。『古今和歌六帖』においてすでにとられた方法であるが、同書の「みかの日」「十六帖」「十五夜」「九日」には景物は組み合わせられていないのである。

今一つの付項目は、同一景物はその状況或は状態から区別したものと考えられる。色による区別（梅）と（紅梅）、（散る）状態の区別（花）と（落花）、（紅葉）と（落葉）、季節による区別（雁）と（帰雁）、（水）と（春水）である。（紅梅）以外の付項目は『古今和歌六帖』では立てられてはいないが、「落花」ならば「花」に、「来雁」「帰雁」は「雁」にまとめて収載されている。つまり『朗詠集』では同一の景物の中から特筆すべきと思われるものを抜き出し、一項目として立てたと考えらるだらう。

『朗詠集』上巻の項目自体の関係は、上巻の場合はこの様に明確であ

る。しかし下巻の場合、両者の間に何か共通する法則を見出す」とは困難であると思われる。

さて性格の面でも様々な付項目はあるが、本文中での立て方となると、諸本間のみならず粘葉本一本に限っても一定ではない。百余りある項目の内のたった十七にしか見られない付項目の立て方が一定しないのはなぜなのだろうか。その立て方による相違点はあるのだろうか。まずは分類整理することから考えてみたい。

目録及び本文中で「付」を有する十七項目をその書式によつて分類すると、次の五種に分類できる。

- ①目録「項目A付B」→本文中「項目A」「項目B」
- ②目録「項目A付B」→本文中「項目A付B」「項目B」
- ③目録「項目A」→本文中「項目A付B」
- ④目録「項目A付B」→本文中「項目A付B」
- ⑤目録「項目A付B」→本文中「項目A」

①～⑤の分類に従つて付項目を整理したものが次の表である。

②		①		分類	
項目名 A B	目録	子日 若菜	子日 若菜	日録	本文
九日 ★	十五夜 月	花 落花	★	梅 紅梅	梅 紅梅
九日付菊	十五夜付月	花付落花	落葉	紅葉 紅葉	水 春水
菊	九月付菊	花付落花	落葉	故宮 仙家 親王 丞相 帝王	雁 雁 雁 雁 雁
⑤		④		③	
管絃 舞妓	管絃 舞妓	水 漁父	文詞 遺文	水 春水	水 春水
帝王 法皇	帝王付法皇	故宮付故宅 仙家付上隱園 親王付王孫 丞相付政	故宮付故宅 仙家付上隱園 親王付王孫 丞相付政	故宮付故宅 仙家付上隱園 親王付王孫 丞相付政	水付魚父 文詞付遺文
帝王		水付魚父 水付遺文	水付遺文 文詞付遺文	水付春水 水付春水	水付春水 水付春水
				★…項目の立て方が詰本と一方が詰本とで一致。又は伝公仕事で「付」は下巻。遣文以下は下巻。	
				みかが一本のみ対立。	
				☆…項目の立て方が一本のみ対立。	

このうち③「三日」では、目録に「付桃」がない為、独自の構成になつてゐる。しかし粘葉本目録では「三日」が行末に書写されており、同筆同系統といわれる伊予切では目録にも「付桃」があることから、誤脱の可能性が考えられよう。目録の「付桃」が誤脱ならば分類は④となるだろう。「三日」のように、付項目の表記方法の相違には誤写誤脱の可能性も考えられないではない。しかしながら、文末別表のように何れの諸本においても表記方法が一定していないことから、何らかの意図があつて書き分けられたと考えられるのではないか。

更に五つに分けた表記方法の中で特に「項目B」の立て方に注目

すると、本文中での表記方法は大きく二通りになる事に気付くであろう。(1)付項目「B」が独立して立てられる①②と、(2)「B」は直前項目「A」に付随した形でしかその名を挙げられない③～⑤である。特に(1)は上巻のみで、下巻では全て(2)の形になっている点には注目すべきである。

付項目が意図して書き分けられているのならば、それは何に因るものなのだろうか。これを考る前に、『朗詠集』での一項目内の詩歌とその配列を確認しておきたい。一例として上巻春部「鶯」を挙げておく。

鶯

63 鶯既鳴兮忠臣待旦 鶯未出兮遺賢在谷

鳳為王賦

i (唐人長句)

64 誰家碧樹 鶯啼而羅幕猶垂
幾處華堂 夢寃而珠簾未卷 晓賦

元

65 咽霧山鶯啼尚少 穿沙蘆筍葉纔分

元

66 臺頭有酒鶯呼客 水面無塵風洗池

白

67 鶯聲誘引采花下 草色拘留坐水邊

白

〔唐人詩句〕

74 やまとさといかではるをしらまし

中務

「鶯」は63～64番が唐人長句（文章・五言詩からの摘句）、65～67番唐人詩句（七言詩からの摘句）、68～69番邦人長句、70～71番

邦人詩句、最後に72～74番和歌の順に配される。この様に『朗詠集』では選び出された詩歌が作者・作品の形態によって整理配列され、原則として順序が入れ替わることはない。勿論全ての項目に唐人長句・和歌の五種類が揃ってはいないが、基本的に邦人詩句の後に唐人詩句が配されることはないのである。この詩歌配列順序が、付項目を考える上で重要なポイントであると考えられる為、以下引用す

68 感同類於相求 離鴻去屬之應春嘲
會異氣而終混 龍吟魚躍之伴曉啼

69 燕姬之袖暫收 猶撩亂於舊拍
周郎之簪頻動 顧問關於新花

菅三品

70 新路如今穿宿雪 舊宿為後屬春雲
71 西樓月落花間曲 中殿燈殘竹裏音

菅

72 あらたまのとしたらかへるあしたよりも
またるゝものはうぐひすのこそ
73 あさみどりはるたつそらにうぐひすの

素性

はつこゑまたぬひとはあらじな 麗景殿女御

74 うぐひすのこゑなかりせばゆきゝえぬ

中務

v

(和歌)

iv (邦人詩句)

iii (邦人長句)

る詩歌には唐人長句～和歌の順序を示すローマ数字i～vを付した。

三、表記による上巻付項目の相違点

(1)付項目が独立して立てられる場合

上巻付項目について、その表記方法による相違点を考えたい。上巻では(1)付項目が独立するものと、(2)付項目は直前項目に付隨する二通りがあるが、まず(1)の場合を見よう。分類①は「子日」「梅」「紅葉」、②は「花」「十五夜」「九日」である。共に節日であり、諸本間でも項目の立て方がほぼ一致している^{注3}。「子日」と「九日」を例として比較してみよう。①「子日若菜」を粘葉本で示しておく。

子日

29 倚松樹以摩腰 習風霜之難犯也

和菜羹而啜口 期氣味之克調也 菅

30 倚松根摩腰 千年之翠滿手

折梅花挿頭 二月之雪落衣 尊敬

31 れのびするのべにこまつのかりせば
ちよのためしになにをひかまし 忠岑
ちとせまでちぎりしまつもけふよりは
きみにひかれてよろづよやへむ 能宣

33 ねのひしにしめつるのべのひめこまつ
ひかでやちよのかげをまたまし 清正

若菜

34 野中芭菜 世事推之惠心 鎌下和羹 俗人属之荑指 菅 iii

35 あすからはわかなつませむかたをかの
あしたのはらは今日ぞやくめる 人丸

36 はるたゞばわかなつまむとしめしに
きのふもけふもゆきはふりつゝ 赤人

37 ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝの
かたみにつめるわかななりけり 貫之

v

「子日」は29～30番邦人長句、31～33番和歌の五首で構成される。長句は29番「松樹によつて腰をすることは」30番「松根によつて腰をすれば」と長生の松にあやかつて長寿を願う子日の風習を詠んだものである。和歌にも31、33波線部に「ねのひ」の語が詠まれることから「子日」は子日に小松を引く様子を詠した詩歌を集めたもので、「わかな」の語は見えないのである。

続く「若菜」では、34番邦人長句と35～37番和歌の四首から成り、34番「野中に菜をえらぶ」、35～37番歌二重傍線部のようへ「わかな」を直接詠んだ詩歌で構成されている。「子日」と「若菜」は、節日と景物という点で結び付けられはいても、言葉の上で重なり合

わないことがわかるだろう。

次に②「九日付菊」はどうだろうか。これも粘葉本から本文を示しておぐ。

九日付菊

261	燕知社日辭巢去	菊為重陽冒雨開	李端	】 ii
262	採故事於漢武	則赤夷插宮人之衣		
263	尋舊跡於魏文	亦黃花助彭祖之術		
264	先三遷兮吹其花	如曉星之轉河漢		
265	引十分兮蕩其彩	疑秋雪之迴洛川		
	谷水洗花	汲下流而得上寿者三十餘家		
	地脈和味	浪日精而駐年顏者五百箇年		
	わがやどのきくのしらつゆけふごとに			
	いくよたまりてふちとなるらむ			
	菊	中務		
266	霜蓬老蠭三分白	露菊新花一半黃		
267	不是花中偏愛菊	此花開後更無花		
268	嵐陰欲暮	契松柏之後凋		
269	秋景早移	嘲芝蘭之先敗	白	
270	鄆縣村闈皆潤屋	陶家兒子不垂堂	元	iv
	蘭苑自慙為俗骨	槿離不信有長生	紀	iii
	保胤	善相公		ii

八

271 蘭蕙菟風摧紫後 蓬萊洞月照霜中 菡三品

一

272 ひさかたのくものうへにてみるきくは

あまつほしとぞあやまたれける 敏行

こゝろあてにをらばやをらむはつしもの

おきまどはせるしらぎくのはな 脊恒

②「九日付菊」では、①「子日」のように九日を表す語は冒頭

番の「重陽」のみである。九日は262番「旧跡を魏文に尋ねれば、ま

た黄花彭祖が術を助く」と故事を引いて菊花を賜る理由を賦すよう

に、菊の花とは切り離せない宴であった。それ故261～265番二重線部

「菊」「黄花」「花」等、「菊」を表す語が詠まれているのである。

九日に詠じられる菊は、264番「谷水花を洗ふ、下流を汲んで上寿を

得たる者三十余家」の様に、長寿を叶えるものとしての「菊」であ

ると考えられる。

後半の「菊」では、267番「これ花の中に偏に菊を愛するにはあらず、この花開けて後に花のなければなり」と菊を愛する理由を賦す様に、269～271番は他の花がしほんだ後も美しく咲く菊の様子を詠じるものである。また「九日付菊」ではいずれの詩歌にも「菊」を表す語があるので対し、後の「菊」では直接その語を詠まず、269番「鄆縣の村闈は皆潤屋す」と黄菊を黄金に喻えた摘句を探るなど、九日とは直結しない菊の詠で構成されているのである。「子日」と

「若菜」がそれぞれ独立した項目であったのに対し、「九日付菊」と「菊」は「九日の菊」と「その他の菊」という二種類の「菊」の項目であると思われる。

子日は中国での人日の故習が伝わったものであるが、その根底には日本古来の野遊びの風習があり、これらが結びついたものと考えられる。この為31、33番歌のように「子日」の語 자체が歌語として定着していると考えられよう。『朗詠集』の「子日」「若菜」いずれにも唐人摘句は取られておらず、また邦人摘句数と和歌数の比が、

「子日」で二・三、「若菜」では一・三と和歌が半数以上を占めていることから、漢よりも和の要素の強い項目であると言える。「子日」29～33番歌にはそれぞれ「松樹」、「松根」、「こまつ」、「まつ」、「ひめこまつ」の様に、若菜と共に子日の景物である「松」が詠じられ、節日としての「子日」と景物である「若菜」は明確に区別できるものであったと考えられるのである。しかし九日は中国渡來の宮廷行事であり、九日の宴が菊花宴とも言われるよう、この行事に伴って移入された菊を詠ずることが主たる行事である故に、「九日」自体が歌語として直接的に詠まれる事は少なかったのであろう。子日の行事に若菜という景物を組み合わせたことに倣い、九日に菊を組み合せたことは、体裁上理に適った事ではあったと思われるが、すでに菊を詠じる場である「九日」に更に「菊」を組み合わ

せたことで、一重の菊の項目になったと考えられる。『古今和歌六帖』において「子日」以外の節日、「九日」「十五夜」等に景物を組み合わせなかつたのは、これらがすでにその景物を詠じる場であるため、改めて景物を付け加える必要はなかつたと考えられるだろう。菊は九日の宴と共に入ってきた花ではあるが、次第に九日とは離れた場所でも詠まれるようになり、『古今和歌六帖』でも三十八首が入集している。だからこそ九日の菊とそれ以外の菊を分けて立てることが可能だったのではないだろうか。

「子日」ほどに「九日」そのものは歌語として定着せず、行事としての「九日」と景物である「菊」が詞の上でも重なる。「九日付菊」の「付菊」は、詞の上で重なり合わない「子日」と区別する為であったと考えられる。

(1)について整理すると、①は本文中では「A」「B」それぞれが別項目として立てられ、目録を見なければ「B」が付項目であることはわからない。これはA、Bの語が明確に区別できるためである。②の場合には「B」は独立して立てられていないながら「A」の付項目としても存在し、重出する形になる。「A」「B」は結果として詠じる対象物が同じであり、区別することが困難である為と考えられる。「子日」「九日」以外にも同様の傾向が見られることから、①②の項目名は意図して書き分けられたものと言えるだろう。

(2)付項目が直前項目に付隨する場合

次に(2)「B」が本文中でも前の項目に付隨して立てられる③～⑤はどうだろうか。③「三日」を見よう。

三月三日付桃

38	春來遍是桃花水 不辨仙源何處尋	王維	」 ii
39	春之暮月 夏之三朝 天醉于花 桃李盛也 我后一日之澤	」 iii	
40	万機之餘 曲水雖遙 遣塵雖絕 書巴字而知地勢 思魏文以飈風流 蓋志之所之 謹上小序 耆	」 iv	
41	煙霞遠近應同戶 桃李淺深似勸盃 耆	」 v	
42	水成巴字初三日 源起周年後幾霜 優茂	」 iii	
43	礙石遲來心竊待 牽流過手先遮 雅規	」 iii	
44	夜雨偷濕 曾波之眼新嬌 晚風緩吹 不言之口先咲	桃始華賦 紀	v
	みちとせになるといふもゝのことしより はなさくはるにあひそめにけり		iii

- (1) 「子日」「九日」等とは異なり「三日付桃」は、「三日」と「桃」が不可分な関係であるかの様に見える。ところが詩歌の配列を見る
と38番唐人詩句、39番邦人長句、40～42番邦人詩句の順に並べられた後、43番邦人長句、44番和歌と配され『朗詠集』の配列規則から外れている。38～44番の詩歌順序には諸本異同が見られないため、

粘葉本の誤写とは考えられず、43番長句は敢えてここに配されたと考えるべきであろう。
詩歌の内容は冒頭38番が王維「桃源行」からの摘句であり、摘句部分からも元の詩題からも「三日」を思わせる語句は見出せない。

39、41番は「春の暮月、月の三朝」「初三日」の語から「三日」。42番「石にさわって遅く来れば」と曲水の宴で盃が流れてくる様子を賦したものであることから三日の詩句として収載されたと思われる。後半二首は43番は詩題「桃始めて華さく賦」が示すように桃の花を詠じたもので、44番歌と共に「桃」に当たるだろう。詩歌の内 容からは38番「桃」39～42番「三日」43～44番「桃」と分けられるのである。また冒頭38番はその一首のみでは「三日」との関わりは見出せないが、39番「曲水遙かなりといへども」41番「水は巴の字をなす」等との関わりから、38番「桃花の水」が曲水の宴を連想もさせる。それならば38～42番「三日」、43～44番「桃」という区切りが出来よう。従つて詩歌の配列に狂いが見える42番と43番の間に、仮に「桃」を立てる事も可能であると思われる。

この様に詩歌の配列から付項目とその直前項目を区別することが可能なのだろうか。他の二項目でも確認しておきたい。④「氷付春水」の場合。

水付春水

318 濟陽江色潮添満 彭蠡^{秋聲}鴈引來

劉禹錫

384 水封水面聞無浪 雪點林頭見有花

荳

319 四五朵山粧雨色 兩三行鳥點雲秋

杜荀鶴

385 霜妨鶴唳寒無露 水結孤凝薄有冰

相如

320 虛弓難避 未拋疑於下流之水急

江相公

386 おはぞらのつきのひかりのさむければ
かけみしみづぞまつこほりける

321 鳳飛碧落書青紙 隻擊霜林破錦機

田達音

387 水消見水多於地 雪霽望山盡入樓

白

322 碧玉裝筆斜立柱 青苔色紙數行書

荳

388 水消漢主應疑霸 雪盡梁王不召枚

尊敬

323 雲衣范叔羈中贈 風櫓瀟湘浪上舟

後中書王

389 胡塞誰能全使節 呼池還恐失臣忠

相規

324 あきかぜにはつかりがねぞきこゆなる

友則

390 やまかはのみぎはまされりはるかぜに
たにのこほりはけふやとくらむ

v

325 山腰歸鴈斜牽帶 水面新虹未展巾

都在中

冬部「水」は384～385番邦人詩句、386番和歌の後に387番唐人詩句、

326 325 はるがすみたつをみすてゝゆくかりは
ゝなゝきさとにすみやならへる

伊勢

v

部「水水面を封じて」「水有り」「こほりける」から冬の水。配列順序の狂う後半は二重線部387～388番「水消えて」、390番「とくらむ」

326 325 326 325 はるがすみたつをみすてゝゆくかりは
ゝなゝきさとにすみやならへる

伊勢

v

388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 609 610 611 612 613 614 615 616 617 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 679 680 681 682 683 684 685 686 687 687 688 689 689 690 691 692 693 694 695 695 696 697 698 698 699 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 709 710 711 712 713 714 715 716 717 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 778 779 779 780 781 782 783 784 785 786 787 787 788 789 789 790 791 792 793 794 795 795 796 797 797 798 798 799 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 809 810 811 812 813 814 815 816 817 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 838 839 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 858 859 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 869 870 871 872 873 874 875 876 877 877 878 878 879 879 880 881 882 883 884 885 886 887 887 888 889 889 890 891 892 893 894 895 895 896 896 897 897 898 898 899 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 909 910 911 912 913 914 915 916 917 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 938 939 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 958 959 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 969 970 971 972 973 974 975 976 977 977 978 978 979 979 980 981 982 983 984 985 986 987 987 988 988 989 989 990 991 992 993 994 995 995 996 996 997 997 998 998 999 999 1000 1000

同様に、

鴈付歸鴈

317 万里人南去 三秋（春）鴈北飛

不知何歲月 得与汝同歸 韋承慶^{注5}

冒頭317番は粘葉本では「三秋」だが伊予切以外の諸本では「三春」である。

となり、諸本間に対立が見られる。今粘葉本の「三秋」に従つておぐと、317～324番「雁」、325～326番「帰雁」となり、324番と325番の間に「帰雁」の項目名を挙げることが出来るのである。

実際に山城切等後世の写本では「雁」部324番歌の後に「帰雁」を、「氷」部386番歌の後に「春氷」の項目名を挙げる物も少くないものである。

上巻の場合には、本文中に「A付B」とのみ項目名を挙げる(2)の場合でも、詩歌の配列によって項目「A」と「B」を分けようとする意識が読み取れよう。しかしそれならばなぜ他の「子日」「九日」のように項目を分けて立てなかつたのかという疑問が起つてゐるのではないか。

そこでもう一度「三日」の項に戻らう。「三日」「桃」では両者合わせて漢詩文摘句六、和歌一の七首から構成されている。仮に詩歌の配列に従つて43番の前に「桃」の名を立てるとき、「三日」に和歌が配されなくなり、「和漢朗詠集」の書名が示す「和」と「漢」の要素が一項目中に取り合わされないと最大の不都合を生じさせる事になるのである。

三日の宴は九日同様中国渡来の行事であり、桃の花もこれに伴つて入ってきた花である。ところが菊が九日の宴と離れた場所でも詠されており、「雁」部324番「雁」、325～326番「帰雁」となり、324番と325番の間に「帰雁」の項目名を挙げることが出来るのである。

「氷」部386番歌の後に「春氷」の項目名を挙げる物も少くないものである。

「三日」の44番歌は『古今和歌六帖』では「みかの日」に収載されており、この一首に三日と桃の両義を見出す事が可能である。その為、「三日」と「桃」を分ける事ができなかつたと考えられるのではないだろうか。

しかし「雁」や「氷」の場合には、それぞれの項目に二首づつ和歌が取られており、「雁」と「帰雁」、「氷」と「春氷」を別に立てたとしても、いずれかの項目で和歌が配されなくなるという危険はない。それにも関わらずこの二項目ではそれを分けて立てることはしないのである。和漢並列の原則以外に原因を求めるならば季節の問題であろう。

『朗詠集』上巻では項目（主題）によって分類された詩歌を、先に編まれた『千載佳句』や『古今和歌六帖』のように歳時部、天象部等といった部立を設けて配するのではなく、四季の流れに沿つてそれらを配する方法で編纂される。その為、来雁も帰雁も主題としては同じ「雁」でありながら、季節は秋と春という矛盾を抱えてい

まるのに對し、桃の花は三日の宴以外に登場する事はほとんどない。桃の和歌は『古今和歌六帖』歳時部「みかの日」に二首、木部「もも」に三首が見えるほか、三代集では『拾遺集』雑春に一首収載されるのみである。三日あるいは桃の歌が少なく『朗詠集』に取るべき歌も少なかつたことは想像に難くない。

「三日」の44番歌は『古今和歌六帖』では「みかの日」に収載されており、この一首に三日と桃の両義を見出す事が可能である。その為、「三日」と「桃」を分ける事ができなかつたと考えられるのではないだろうか。

しかし「雁」や「氷」の場合には、それぞれの項目に二首づつ和歌が取られており、「雁」と「帰雁」、「氷」と「春氷」を別に立てたとしても、いずれかの項目で和歌が配されなくなるという危険はない。それにも関わらずこの二項目ではそれを分けて立てることはしないのである。和漢並列の原則以外に原因を求めるならば季節の問題であろう。

『朗詠集』上巻では項目（主題）によって分類された詩歌を、先に編まれた『千載佳句』や『古今和歌六帖』のように歳時部、天象部等といった部立を設けて配するのではなく、四季の流れに沿つてそれらを配する方法で編纂される。その為、来雁も帰雁も主題としては同じ「雁」でありながら、季節は秋と春という矛盾を抱えてい

るのである。

更に本集では大分類として四季の各部を置きながら、秋部に帰雁という異なる季節の景物を許容する一方で、同一主題は季節を隔て、重ねて立てる事はしない。つまり、秋部には秋の「雁」、春部には「帰雁」と季節としての統制を図ることより、「雁」という主題での統一を優先させていると考えられるのである。

それでも敢えて「帰雁」「春水」を独立させずに付とした事は、異なる季節への配慮があつたのではないか。

上巻付項目の書式は、細かく見ると①～④に分けられるが、いずれの場合でも「A」と「B」を分けようとする配列になっていることが確認できる。その上で各々の語が明確に区別できる場合には、①の様に「A」「B」を別々に立て、詞の上で重なり合う場合には、②「A付B」さらに「B」と二重に項目を立て、分けた時に何らかの不都合が生じる場合には③④「A付B」の様に表面上は一つの項目にしながら、その内部の詩歌の配列によって区別するという方法を採っていると考えられるのである。

四、下巻との比較から見た特徴

この様な上巻の特徴は下巻と比較するとよくわかるだろう。下巻付項目は分類④「A付B」となる場合と、本文中では付項目がない⑤「A」のみのどちらかである。諸本間で多少異同が見られるものの、上巻の様に付項目が独立して立てられる事はないのである。

下巻の例として、諸本共通して付される「故宮付故宅」を取り上げた。

故宮付故宅^{住⁹}

530	陰森古柳疎槐	春無春色	獲落危牖壞字	秋有秋声	
531	臺傾滑石猶殘砌	簾斷真珠不滿鉤			連昌宮賦
532	暴吳滅兮有荊棘	姑蘇臺之露瀼々			
533	老鶴從來仙洞駕	咸陽宮之煙片々			
534	孤花夏露晞殘粉	暮鳥栖風守廢籬			
535	荒籬見露秋蘭泣	深洞聞風老檜悲			
536	向晚簾頭生白露	良春道			
	終宵床底見青天	菅			
	善宗	英明			

つきのもるにもそではぬれけり
きみなくてあれたらやどのいたまより

うらさびしくもなりにけるかな

いまはよなこそむかしこふらし
いにしへはぢるをやひとのをしみけむ

④に当たる「故宮」は、項目名の立て方としては上巻「三日」等と同じだが、詩歌の配列という点で大きく対立しているのである。冒頭530番唐人長句から539番和歌までがいよいよ順序通りに配され、上巻の様に詩歌の配列から「故宮」と「故宅」を分けることができないのである。

詩歌の内容は、波線部530番「連昌宮」、532番「姑蘇台」「咸陽宮」、533番「仙洞」、535番「深洞」等の語が宮殿を表し、この四首が「故宮」として収載された摘句であると思われる。残りの詩歌には特に宮殿を表す語はなく、二重線部531番「台傾いて」「簾を断つて」、534番「廢離」、537番「あれたるやど」等建物の荒廃した様子が詠われ、「故宅」を詠じた詩歌であると思われる。内容からは530番「故宮」531番「故宅」、532～533番「故宮」534番「故宅」、535番「故宮」536～539番「故宅」となる。「故宮」と「故宅」がない交ぜにして配されており、これらを分けようとする意識が感じられないのである。

同様のことは分類⑤「管絃」等でも確認出来る。下巻では何の場合でも項目内部の詩歌は『朗詠集』の配列規則に従って詩歌を配

列しているため、項目「A」と「B」が分けられず、この点で上巻とは明らかに構成が異なるのである。

九

上下巻で付項目の構成方法に相違が起るの原因の一つに、所収詩歌数が考えられる。一項目内の漢詩文摘句と和歌の数^{往¹⁰}を比較するとその違いが明らかであろう。上巻の場合、「梅」では摘句六首対和歌三首、「紅梅」四対二、「雁」七対二と、和歌が摘句に比して見劣りしない程に収載されている。しかし下巻の場合には、「管絃」で摘句七に対して和歌一首、「仙家」に至っては十三対一と圧倒的に漢詩文摘句が多いのである。和歌は季節によそえて事物を詠じるのであり、下巻のような項目は直接的には歌の題材にはなりにくく、〈和〉よりも〈漢〉の要素が強いことは否めず、下巻の付項目に和歌が少ないのも当然の事であろう。

下巻の半数以上の付項目では和歌が一首しか取られていない。従つて上巻の様に付項目を独立させると、その何れかに和歌が配されなくなくなるという不具合が生じる。その為、下巻ではA、Bが混在する結果となつたと思われるのである。或いは下巻では元よりその両方を収載する目的はなかつたとも考えられるだろう。

下巻同様一項目中に一首の和歌しか収載していない上巻「三日」が、敢えて「三日」と「桃」を分けようとする配列を試み、44番歌

「みちとせに」一首に三日と桃の両義を持たせようとしていることは既に述べた通りである。しかし下巻の場合には一首中に二項目の意を求める事は出来ない。

例えば「管絃付舞妓」には、469番歌「ことのねにみねのまつかせかよふなりいすれのをよりしらべそめけむ」の一首が取られている。

この歌に付項目である〈舞妓〉を感じることは困難であろう。また前掲の「故宮」では下巻にしては珍しく一項目中に三首の和歌が取られているが、やはりその中に、ここでは「A」にあたる「故宮」を意味する語は見出せず、却って付項目である「故宅」の歌のみで構成されていると考えられるのである。この点からも下巻では項目A、Bの両方の詩歌を取り入れようとする意識は低いと言えよう。

付記：本稿は、平成十三年七月七日武庫川女子大学に於いて行われた第七十六回和歌文学会関西例会の発表に基づくものであります。席上、有益なご教示を頂きました先生方に御礼申し上げます。

五、おわりに

『朗詠集』の付項目は全てが同一の形式で立てられるのではなく、様々な形で構成されている。特に上巻と下巻では同じように見えるが、大きな相違点が見られる。それは本文中で項目名が「A付B」の形になっている場合にも、上巻では詩歌の配列からA・Bを分け

ることが出来たのに対し、下巻では不可能だという点である。

下巻には和歌の題材にはなりにくいものが多く、和歌の数が上巻に比べて少ないが、その少ない和歌を漢詩文の題材に合わせ、和漢の名に相応しい様に〈和〉と〈漢〉を繋ぐ役割としての付項目が存在しているのではないだろうか。

付項目の立て方の違いは誤写誤脱といった単純なものではなく、一々の項目の内実に合わせ、きめ細かく対応した結果生じた問題であり、その項目（主題）に対する和歌の詠まれ方に大きく影響されていると言えよう。

《注》

1 下巻巻頭には特に部立名を記さないが、仮に雑部と呼んでおく。（）内は脱落と思われるもので、本文中より補つた。また、

秋部「九月付菊」は、本文中より「九日」と改めた。

2 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』

(I)『和漢朗詠集』の構成二、『和漢朗詠集』上巻四季部の構

成——先行詞華集との関連において(一)

別表参照

4 粘葉本「王羅」他本より改めた。

5 粘葉本「文選」他本より改めた。

6 粘葉本「尋」他本より改めた。

7 粘葉本「音」他本より改めた。

8 この詩句粘葉本にナシ。他本より補った。

9 本文中では「付破宅」だが、目録及び他本に従って以下「故宅」

と呼んでおく。

10 一項目内の和歌数は下巻「佛事」の四首を除くと三首が最多数

である。

《参考文献》

- ・ 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』(一九九五年九月二十日初版発行 勉誠社)
- ・ 堀部正二編著『校異和漢朗詠集』(一九八一年七月七日 大学堂書店)

《『和漢朗詠集』諸本複製・影印》

【粘葉本】『粘葉本和漢朗詠集』(卷上)・(卷下)・『日本名筆選

8・9』(一九九三年二玄社)

【伊予切】『倭漢朗詠抄』(内題による) (出版者・出版年等詳

細未詳) *補写部分は、小松茂美氏著『古筆学大成第十三卷 和漢朗詠集』

(一九九〇年六月二十九日 講談社) によった。

【近衛本】陽明文庫『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(陽明叢書

国書篇第七輯) (一九七八年 思文閣出版)

【関戸本】『和漢朗詠集上・和漢朗詠抄下』(内題による) (一

九一八年 尚古会)

【雲紙本】小松茂美氏著『古筆学大成第十三卷 和漢朗詠集』

(一九九〇年六月二十九日 講談社)

【伝公任筆卷子本】佐佐木信綱氏解説『傳藤原公任卿筆 御物

倭漢朗詠集』(一九九三年 尚古会)

【葦手下絵本】小松茂美氏監修『平安 藤原伊行 葦手下繪本和

漢朗詠抄』(日本名跡叢刊 四十七・四十八回配本) (上巻・下

巻) (一九八〇年十月二十日・十一月二十日初版発行 二玄社)

【傳藤原公任卿筆 御物 倭漢朗詠集】(一九九三年 尚古会)

《別表》付項目の諸本対照表（本文中の項目名）

(1) 上巻

	諸本	項目名
山城切	桃	三日
三日付桃	三日付桃	三日付桃
紅梅	紅梅	紅梅
月	十五夜付月	月
菊	九日付菊	菊
若菜	子日	子日
落葉	落葉	落葉
花	花	花
雁	雁	雁
水	水	水

(2) 下巻

	諸本	項目名
	管絃	管絃
管絃付舞妓	管絃付舞妓	管絃
文詞付遺文	文詞付遺文	文詞
水付漁父	水付漁父	水
故宮付故宅	故宮付故宅	故宮
仙家付道士臨倫	仙家付道士臨倫	仙家
帝王付法皇	帝王付法皇	帝王
親王付王孫	親王付王孫	親王
丞相	丞相	丞相

* 伊予切（）内は後世の補写。「帝王」は現存せず。雲紙本（）内は別筆か。

(はせがわ
ゆきこ／本学大学院生)